



楽器を修理するラングさん



アトリエの壁には修理に出された
たくさんの楽器が



ラングさんとコントラバス談義



ミュージックフェラインにあるラングさんの店



店内のショーウィンドウ

ガイゲンバウアー ～ウィーン・フィルの音を作る

ミュージックフェライン北東の角にある弦楽器専門店「ラング」は、建物が建設された1870年からこの場所にある。「音楽の都ウィーンの看板ともなるべきコンサートホールには、ステージや楽屋などと同様に弦楽器のアトリエも必要不可欠である」と、建物の設計の段階から計画されていたのである。

ちょっと見ただけでは何の変哲もない、こじんまりとした普通のお店だが、実はこのアトリエ、世界でも類のない大変な実績を持つ工房なのだ。

店の主人オトマル・ラングさんは、この店の創立以来5代目に当たる弦楽器製作の専門家である。マイスターウィーンフィルやシュターツオペラ（国立歌劇場）のオーケストラで使用されている弦楽器は、全てこのアトリエに所属していた名匠達の手によって1台1台丹精こめて作られた物ばかりである。

ヨーロッパの大オーケストラには多くの場合「楽団所有の楽器」がワ



アトリエ全景

ンセット以上準備されている。
ウイーンフィルの場合もこの例にも
れず、ウイーンフィルの演奏会は全
てこの楽団の楽器を使用して行わ
れる。国立歌劇場にも同じように、
そこ専用の楽器がある。

ウイーンフィルの楽器はいつも全
てミュージックフェアインに保管され、
歌劇場の楽器は歌劇場に置かれて
いる。つまりウイーンフィルのメン
バーは、フィル用の楽器、オペラ用の
楽器、そして自分の楽器、と常にそ
の活動の場が変わるごとに楽器を
持ち変えて演奏しているのだ。

オーケストラでは常に数十台の
弦楽器が同時に使用されるが、この
うちのほんの数台だけが値もつけ
られないようなとびきりの銘器
で、残りは誰でも買える並製器と
いうような状態では、決して良い音
は生まれな。

たとえば第一ヴァイオリンの
パートに12人のヴァイオリニストが
いるとしよう。彼等の楽器がそれ
ぞれ12の異なる音色を出すので
はなく、全員が「ひとつ」にましま
った音として響く事が大切なのだ。
第2ヴァイオリンも、ヴィオラも、
チェロも、コントラバスも、皆同じで
ある。

ウイーンフィルはこの理想像を、
あたかも当たり前のように、
いとも単純に解決してしまった。

この店の初代マイスター、レムベック氏が1870年から90年にかけて製作した弦楽器を核とし、それにその代を継ぐハウデック、ボラー、フーバー、そして現在のラングさんの製作した楽器が加わる事によって、現在のウイーンフィルの弦楽器群が完成している。こうしてみると、ウイーンフィルの弦楽器は比較的新しいものばかり、という事が言える。しかし全ての楽器が「ウイーンタイプ」と呼ばれる、イタリア生まれの弦楽器とは少し違うもののみで揃えられており、これがあの、いぶし銀というかビロードというか、例の魅惑的な音色が生まれる秘密のひとつなのである。

ウイーンタイプの楽器は、他のものと比較して楽器の胴体の持つふくらみがより大きく、横板もたつぷりと幅がとつてあるために、楽器の厚みが比較的厚くなっている。最大の特徴は「室内楽の演奏により適している」事。ソロ楽器として会場の最後列まで音が通る、というよりは、合奏した時にお互いの楽器の音がよく調和し合うのだ。

楽器の仕上げとして塗られているニスもイタリア製のものと少し違う。

アルプスの北に位置するウイーンと南の国イタリアでは、気候も全

く違う。この寒い、北の山国の気候に適したニスは、南のものに比較してより硬質で、色も濃いものとなっている。

これらの楽器を製作するばかり



ヴァイオリン作りのマイスター(親方)の証明書

店番はいつもラング夫人の仕事

でなく、その管理とアフターケアについてもラングさんが全責任を負っている。

リハーサル中に切れた弦はもちろん、具合の悪いパーツの修理も、

団員に対しては全て無料で行われる。レコーディングの時にも常にスタンバイしているし、ウイーンフィルや歌劇団の演奏旅行の際には、そこそ地の果てまでもつき添って行き、万一の故障に備えている。

ヴァイオリン製造という技術、ヨーロッパではいまだに徒弟制度によって後世に伝えられている。マイスターと呼ばれる親方の下に弟子入りして、そこで基本から叩き込まれながら覚えていくのだ。

ヴァイオリン作りを習得するコースは、オーストリアのシステムでは一応3年間で終了できるようになっており、最後に国家試験が受けられる。ラングさんが若かった頃はもつと時間をかけて勉強したそうだが、それでは現代っ子が許容できない。忍耐の限界を越えてしまいうらい。

1台のヴァイオリンを手作りで仕上げるまでには、約200時間かかるのだそうだ。自身優れたヴァイオリニストである必要はないが「良い音感」だけは最低条件。手先が器用、とか、やはり人によっての向き、不向きはあるようだが、自分の手によって物を創造する、という快感は、一口では言い表せない喜びとなる。